

インドネシアにはまった私

国立職業リハビリテーションセンター 山田 文典*

1. プロジェクトの概要

インドネシア共和国の障害者職業リハビリテーションに対する日本の援助は、国立障害者職業訓練センター設立に関する無償資金協力要請に始まり、長期および短期専門家の派遣、カウンターパートの受け入れ等を経て、本格的な技術協力に至ったものである。概要は次のとおりであった。

目的：職業リハビリテーションシステムの開発

期間：1994年12月20日から3年間

場所：中部ジャワ州の古都スラカルタ市（旧名ソロ市、日本でいえば奈良のようなところ）にある国立身体障害者リハビリテーションセンター（以下、「ソロセンター」という）

協力分野およびメンバー：

チーフアドバイザー 川上 方満

（(財)雇用情報センター）

職業訓練（縫製） 棚橋 清枝

（日本障害者雇用促進協会）

職業訓練（コンピュータ） 平川 和男

（雇用促進事業団）

職業指導・評価 山田 文典

（日本障害者雇用促進協会）

業務調整 平川ちかこ / 田中 和彦

（国際協力事業団）

1995年1月18日に着任したわれわれは、しばらくの間、住宅探しや使用人探しをしながら生活環境を整備するとともに、業務計画作成、訓練ニーズ調査、機材受け取り、事務備品・消耗品の整備、関係機関訪問、各種会議への参加、調査団への対応、カウンターパート研修の準備、日本からの専門家要請のアドバイス等、多事多端の日々を送った。業務そのも



インドネシア全図

* 現障害者職業総合センター

のは多事多端とは思わないが、日本と比較すると、移動や連絡に時間と手間がかかり多事多端になってしまうことが多かった。水道水が飲めないなど不便なことも多かったが、それ以上の楽しみもあった。今まで刺激を受けずに眠っていた脳細胞がたたき起こされたような気がした。縁のなかった歴史、文化、宗教に接することができた。ラーメン一杯50円という物価の安さも魅力であった。

このプロジェクトは、同国に対する本格的協力の第1段階として位置づけられていた。その役割を一言でいうと、職業リハビリテーションの種を蒔いて苗を育てることである。われわれは、元気の良い苗を育てるべく、畑を耕し、良い種を蒔き、水や肥料をやり、草をむしるなど最大限の努力をする決意で臨んだ。

2. 国立身体障害者リハビリテーションセンター

2.1 沿革

インドネシアのリハビリテーションは、1945年から1950年にかけての独立戦争の傷痍軍人対策として、1946年、スハルソ博士らによって中部ジャワのソロセンターで始められた。ソロセンターは、義肢・装具をはじめとする医学的リハビリテーションからスタートし、職業教育、社会リハビリテーションへと業務を拡大し、一時はトータルなリハビリテーションサービスを提供していたが、技術革新等ニーズの変化に対応するため、1986年、義肢・装具関係の病院を移転するとともに、労働事務所からの職員の派遣を中止し、社会リハビリテーションサービスを中心とする施設に変化してきた。さらに最近は、めざましい経済発展、すべての国民に就職の機会を提供するとの考えから、労働市場への参加をめざす方向に変化してきており、わがプロジェクトもこれを支援する目的で、ソロセンターに配属された。

2.2 業務の現状

ソロセンターは、肢体障害者の社会参加を目的と

して運営されている社会省の社会リハビリテーション開発総局直轄の施設である。1994年度は、職員数232人、運営費約6000万円で運営された。運営費の内訳は、経常経費約5000万円、プロジェクト等に用いられる開発経費約1000万円であった。主な業務内容は次のとおりである。

(1) 準備部

準備部は、受付相談、宿泊施設関係業務、健康管理指導、社会人としてのマナーを身につけるためのガイダンス、ケース会議の開催等を行っている。訓練生の募集は、社会省の地方事務所を通して年2回行われている。障害の種類は、ポリオ等の疾病による下肢障害が圧倒的に多い。

(2) サービス部

サービス部は、適性検査、適作業の選定、職業前訓練（日本の職業訓練とは異なり、作業指導に近い）等を行っている。適性検査では、面接、学力テスト、作業検査を主として活用している。職業前訓練は、定員350人、訓練期間は原則6ヵ月で運営されている（わがプロジェクトは1年）。1995年現在、訓練職種は、写真、ラジオ修理、バイク修理、テレビ修理、縫製（男子・女子）、理容、時計修理、溶接、旋盤、美容、印刷、木工、家具研磨、木彫、義肢装具修理、編物、刺繍、手芸の18職種で、124人の訓練生がいた（わがプロジェクトはコンピュータと縫製の2職種で初年度20人、2年目から40人）。

(3) 援護部

援護部は、職業指導、社会生活の援助、フォローアップ等を行っている。過去の年度別の措置状況をみると、74%が自営（農業、屋台、行商等）、21%が雇用、4%が保護雇用となっていた。インドネシア全体の労働力人口の構成比をみても、自営が63%、雇用32%と、企業への就職はきわめて難しい状況なので、ソロセンターの数字は、一般労働市場に準じた措置状況と評価できる。

3. インドネシアの労働事情

3.1 勤労者の横顔

わがプロジェクトの訓練生が入っていく職業の世界はいったいどうなっているのか。友人の紹介を通してインドネシアの労働事情を紹介したい。

料理の達人ヨコ

カリマンタン生まれのヨコ(32歳,男性)は,ジャカルタの日本料理屋で働いていたころ奥さんと知り合い,お互いの両親がソロ市の近くということもあって結婚。小学校2年生と3歳になる子どもがいる。今はソロに帰って,ホテルのコックをしており,月収は約1万5000円。家族4人が生活するには少し足りないので,奥さんが自宅で靴を売って生活の足しにしている。ある日,彼が私を家に招待してくれた。通勤用のバイクに2人乗りして,途中,牛やヤギに横目で見られながら炎天下を約5 km走って家についた。家は妻の実家で,築30年の平屋。中に入って見回すと,応接セット,カラーテレビ,冷蔵庫,子どもの学習机と一応家具はそろっており,食器棚には,ジャカルタ時代の思い出として日本酒の空き瓶が3本飾ってある。夢は自分の家を持つことだそう。

ソロの月額最低賃金が5000円なので,これと比較すると生活は中の上と思われる。単純に比較はできないが,日本の1995年度の日額最低賃金(全国加重平均)5500円は,インドネシアの1ヵ月分に相当する。また,メイド,農園労働者,商店の手伝いなど勤労者全体の3人に2人は,これよりもさらに安い賃金で仕事をしている,とヨコは話してくれた。

商売上手のヤンティ

ソロ近郊の村で生まれたヤンティ(22歳,女性)は,高校を卒業してソロのスーパーに就職して2年目の働き盛り。給料は月7000円で,縫製会社やタバコ工場で働くよりはるかに高く仕事もきれいだが,立ちっぱなしの仕事は楽ではない。たまに日本人がシャツやズボンを買いにきて,下手なインドネシア語で派手だ,地味だと注文をつけるが,「似合いますよ。それに今買えばカッコイイ帽子がもらえます」となかなかの商売上手。自宅からは通勤できないので,寮に入っている。寮では4畳半に3人で

生活し,ベッドが1つしかないので,2人がベッドに寝て,1人は床に寝ており,部屋にはエアコンも扇風機もなくラジカセが1つあるだけ,という。

彼女の場合は,大手のスーパーということもあって,最低賃金以上の給与,職場の隣の寮,週1日の休暇,年1ヵ月分のボーナスありと比較的恵まれているが,地元新聞では連日,縫製会社の最低賃金違反,給与の遅配,ボーナス不支給,倒産,不当解雇などのニュースが報じられていた。「あゝ野麦峠」を思い出させるような工場がたくさんある。

3.2 天国と地獄

一般的な労働事情を統計資料でみると,年300万人程度の労働力人口の増加,完全失業率の上昇などがうかがえる(表1)。最近,中学校まで義務教育になったので今後は高学歴化が進むと考えられるが,1994年の就業者8200万人のうち,3人に1人は学歴なしである。また,産業別構成比では,現在2人に1人が農林漁業に従事しているが,この比率は年々減少している。

一方,事業所の状況はというと,1993年の統計で全260万事業所のうち,従業員100人以上の大企業および20人以上の中企業数は約2万社で,事業所の大半は小企業または自営業である。従業者数の構成比では,雇用32%,自営や家族従事者(農業,屋台,行商)63%となっており,雇用労働者の割合は3人に1人と低い。

表1 労働力事情(1971~1994)

(単位:100万人)

年 度	1971	1980	1985	1990	1994
10歳以上人口	80.5	104.3	120.4	135.0	147.8
労働力人口	41.3	52.4	63.8	73.9	85.8
就業者	37.6	51.5	62.4	71.6	82.0
完全失業者	3.6	0.9	1.4	2.3	3.8
非労働力人口	38.3	51.9	56.6	61.1	62.0
無回答	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
労働力人口比率(%)	51.3	50.2	53.0	54.7	58.0
完全失業率(%)	8.7	1.7	2.1	3.2	4.4

注) インドネシアの労働力人口は10歳以上,日本は15歳以上。

インドネシアの労働事情を一言でいうと、労働力の供給過剰である。就職を希望する人は掃いて捨てるほどいる。このため、賃金は低くならざるをえない。公務員は、民間企業よりもさらに賃金が低いので士気が低く、生活を守るために自営（自衛？）をしている人が多い。

労働安全衛生に対する配慮も不十分である。いつ事故が起きてもおかしくない工場がたくさんある。労働省は、1994年度の労働災害死者数を300人と発表した（Jakarta Post,1995/10/27）が、実態とかけ離れているといわざるをえない（労働白書によると1994年度の日本の労災死亡者数は2300人）。それともここでは、バイクの値段が人の補償金より高い（？）ので、配慮する必要がないと考えているのであろうか。いずれにしても、雇う側にとっては天国、雇われる側にとっては地獄である。

4. 業務実施状況

4.1 募集活動

サービスの対象となる障害者の応募資格については、当プロジェクトが開始される前の調査段階で、縫製科は中卒以上、コンピュータ科は高卒以上、中部ジャワ州またはその周辺に居住していること、が決められている。また、就職先確保が困難と予想されることから、カウンターパートと検討のうえ、年齢19～30歳、上肢障害がない、等の条件を追加した。

応募資格は決まったが、これを社会省の州事務所、県事務所を経て各郡に1人いる郡社会事務担当者に連絡し、応募者を募ってもらうのに日本では考えられないくらい手間と時間がかかる。公文書で連絡しただけでは第一線の担当者には届かない。効率的ではないが、直接出向いて、足で稼ぐ方法が最も効果的である。1期生および2期生の応募者および訓練生の状況は表2のとおり。障害原因別では4人のうち3人がポリオ（急性灰白髄炎）であった。

4.2 職業評価

われわれは、社会省所管の既存のソロセンターの

表2 年度別・科別応募者および訓練生

（単位：人）

年度 \ 科	縫 製	コンピュータ	計
1995	(15) 10	(19) 10	(34) 20
1996	(46) 20	(57) 20	(103) 40
計	(61) 30	(76) 30	(137) 60

注1) 訓練定員は1995年度20人、1996年度40人。

注2) ()内は応募者であって職業評価を実際に受けた者。

中で業務を行っている。したがって、従来業務を承知したうえで、従来業務と区分するなり、統合するなりして業務を行う必要がある。このため、従来から行われている職業評価を検討したところ、募集・評価・就職活動という全体のシステムはおおむね日本と同じである、入所の可否は地方の社会事務所から送付された応募書類で行う（書類選考）、評価目的は障害者の現状把握と訓練科目の決定、サービスが細切れで評価担当者は評価だけをやっており、募集活動や就職活動にあまり関心がない、評価担当者は、テストの知識・技術が不十分ということがわかった。

そこでプロジェクトの職業評価は、これらを踏まえたいうで、基礎的・実践的なことに重点をおいて行う、日本の評価システムを導入するだけでなく、従来業務の問題の改善にも努める、評価の基準となるデータがないので、応募者のデータを蓄積して評価基準を作る等により実施した。

評価・選考を経て2期生40人が決まり、オリエンテーションが始まってやれやれと思っていると、実際は39人で、1人足りない。あわててカウンターパートと出張。県社会事務所と郡事務所を訪問した後に、山奥にある本人の家へ向かった。山の頂上近くにある家は、遠いうえに道が狭くて車が入らず最後は徒歩。やっとの思いでたどり着いたが、誰もいない。村長に相談したところ、「本人は山の向こうの友人宅で家事手伝いをしている。家族がいないので



山を越えて職場開拓に向かう

センターからの通知はそこへ転送した」とのこと。再び山道を走って山の向こうの友人宅へ。やっとご対面となった。本人の話では、「山のかなたは、電話もなく、郵便の配達は週1回」で、3週間も前に送付された合格通知をまだ受け取っていなかった。

合格を通知して最終的に40人がそろい、めでたしめでたしとなったが、インドネシアの通信事情を体で体験する事件であった。

4.3 職業訓練

職業訓練は縫製とコンピュータの2科で行った。平川専門家担当のコンピュータ科は、企業の一般事務部門への就職を目標に、アプリケーションソフト操作を中心に、OSや基礎的なプログラムの知識を組み込んだカリキュラムで訓練を行った。棚橋専門家担当の縫製科は、縫製工場への就職を目標に、動力ミシン操作を中心にしたカリキュラムで訓練を行った。両科とも、就職先の実態に合わせて個別指導できる弾力的カリキュラムになっており、期間は10ヵ月であった。

4.4 職場開拓・職業紹介

インドネシアの労働市場については、すでに述べたとおり「雇う側にとっては天国、雇われる側にとっては地獄」であるうえに、日本と違って、雇用率制度に基づく納付金・助成金制度を持っていない。このため訓練生の職場開拓は大変難しい。職場開拓



就職した訓練生と談笑する事業主

先企業に関する情報は、社会省・労働省・内務省及びアピンド（インドネシア事業主連合）の連携要領に基づき、主としてアピンドから入手した。アピンドは、日本の日経連に相当する全国ネットの事業主団体であり、1期生の職場開拓に当たっては、職場開拓の対象事業所リストの提供、事業所への同行など、担当者が協力的で非常に助けられた。たまたま担当者が積極的なのか、アピンドが組織的に協力してくれているのかはわからないが、これが職場開拓の命の綱であった。

5. 私はなぜインドネシアにはまったか？

1994年12月に開始されたソロプロジェクトは、1997年12月、ジャカルタ郊外のチビノンプロジェクトにバトンタッチして店じまいした。インドネシアでの3年間は、さまざまな体験と思い出を残してくれた。最後に「私はなぜインドネシアにはまったか」を報告し、拙稿にピリオドを打つこととする。

5.1 4万kmの職場開拓

障害者雇用に理解のある事業主を探すのは骨が折れることで、私は、3年間、職場開拓に明け暮れたといっても過言ではない。ある時は穴のあいたカマボコのような道を通って山の中へ、またある時は片道6時間もかけて新興工業団地へと、訓練生の職場開拓に走り回った。走行距離は延べ4万kmで、地

球1周に相当する。

企業回りは門前払いされることが多いので苦勞もあつたが、仕事を終えてカウンターパートと食べた夕食の味は忘れられない。焼き鳥のような焼きヤギはパワーの源、ニガウリの油炒めはビタミン豊富な健康食品、デザートとして路上で食べたドリアンは果物の王様。ドリアンを初めて食べたときは、色も臭いもほとんどウンコであつたが、今は人の分まで食べてしまうほど大好きになつた。

職場開拓の際に宿泊するホテルでは、室内に蚊やヤモリがいたり、洗面用具がなかったり、長時間停電になつたりすることがある。このため、サンダル、洗面用具、香取線香、懐中電灯、医薬品等の七つ道具を必ず持って出張した。地方の星のついていないホテルの施設・設備は決して満足できるものではないが、スタッフの客のもてなし方には感心した。下手なインドネシア語でディスカウントを要求する日本人に対して、笑顔を決やさず接してくれる。またここに泊まるうという気にさせてくれる。おかげで出不精の私も、旅行好きになつた。

5.2 ヌリモとサバル

私は専門家として技術を教える立場にあつたが、振り返ってみると逆にインドネシアから教わつたこと、学んだことのほうが多い。例えば、ジャワ人のモットーとされている、ヌリモ (NERIMO) とサバル (SABAR)。

ヌリモとは、現実や運命をありのままに受け入れること。ジャワ人は、たとえそれが自分にとって都合の悪いことであっても素直に受け入れて大肯定する懐の広さ、深さを持っているようだ。限りなく寛容で、優しく、楽天的、肯定的である。これが宗教から来たものか、生活の知恵から生まれたものかはわからないが、とても好感が持てる。

一方サバルとは、機が熟すのを待つ、我慢、忍耐である。ある時私は汽車を待っていた。1時間待っても2時間待っても来ないのでイライラして、隣で待っている人に尋ねたら、「遅れている理由はわからないけど、そのうち来るでしょう。サバルですよ」といわれた。いつものことで慣れているのか、

我慢強いのか、のんびりしているのか、暇なのかわからないが、プラットホームのみんなが、膨大なむだな時間を楽しむようにサバルしている。私もじたばたしても始まらないので一緒にサバルを楽しむことにした。

ジャワの人と一緒に生活し、働くことをとおして、私はこの寛容と忍耐を学んだ。

5.3 何なんだ、この明るさは！

日本には吉本というお笑いがあるが、インドネシアにもこれに似たスリムラットというグループがある。私は、毎週テレビで放映されるスリムラットを楽しみにしていた。

例えばある日、ノー天気な娘が、蛍光灯のようにのんびりした恋人を家に連れてくる。そこへ成金の親が帰ってきて「こいつは何者だ」とお手伝いさんに聞く。お手伝いさんは駄洒落ばかりで要領を得ない。追い打ちをかけるようにキザな男が現れて、俺が本当の恋人だ、“OK” “No Problem” とわけのわからない英語で娘を口説く。そのうち、インドネシア語、ジャワ語、英語が入り乱れて大騒ぎになる。

表向き堅そうな印象のあるインドネシアだが、庶民の日常生活はざっくばらんで、くだけていると思う。職場では業務のこと、家では子どもや家計のことと、日本と同じように問題を抱えているにもかかわらず、ジャワの人はいつもニコニコしていて、悩みがないように見える。仮にあつたとしても、カラッと笑い飛ばしてしまうおおらかさを持っている。派遣される前は少し暗いかなという印象を持っていたインドネシアが、こんなに明るいとは思わなかった。何なんだ、この明るさは！

6. また会う日まで

私はインドネシアでの体験を自分の国際理解の第一歩と位置づけ、また機会があれば、マレーシアでも、フィリピンでも、もちろんインドネシアでも国際協力業務に細く、長く、深く関わっていきたいと考えている(関係機関のみなさん。仕事でもプライベートでもインドネシアに行く機会がありましたら
Buro Pusat Statistik, Statistik dalam 50 Tahun Indonesia Merdeka, 1995